



クリスマス・ボックス

12月1日のことです。寒い午後、外では雪がちらついていました。トリスタンとデリックは、クリスマスカレンダーを作るのに夢中です。飼葉おけの場面が背景になっており、12月1日から始めて毎日1つのまどを開けていくのです。中には、その日のアクティビティやプロジェクトのアイデアが書かれています。

カレンダーをうまく重ね合わせるのは、ちょっと大変でした。デリックはそれをうまく合わせようとしていましたが、トリスタンはじれったくなって、「ぼくにやらせて。」と言いました。少したつと、また「ぼくにやらせてよ！」と言いました。トリスタンは何度もそう言いましたが、そのたびにデリックは首を横にふって、作業を続けていました。

ついにトリスタンはおこって言いました。「ちゃんとやってないじゃないか！ これ、ぼくのカレンダーなんだ。返してよ！」

「でも、今やってるよ。」と、デリックが答えました。

「もういいから、返して！ 手伝ってもらうんじゃないよ。」と、トリスタン。

こうした言い合いをしているうちに、2人はおたがいにもっと腹を立てて、しまいには、どなり合いのケンカになってしまいました。



「ふたりとも、もういいかげんにしなさい！」 ちょうど部屋に
はい 入って来た ジェイクおじいちゃんが 言いました。「ろうかの
む 向こう側からも、お前たちが 言い争っているのが 聞こえて
きたぞ。もっと、落ち着いて 物事を 解決しないと。言い争っても、
なに 何も 解決しないし、おたがいに もっと 腹が 立ってくる だけじゃ
ないか。」

トリストアンと デリックは、悲しそうに 顔を 見合わせました。

「クリスマス・ボックスについての お話を したことは あったかな？」
と、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

ふたり 2人の 顔が パツと 明るく なり、2人は「まだだよ。」と、
くち 口を そろえて 言いました。「話してくれるの？」

「ああ。きっと、お前たちにとって、役に 立つだろう。」



まいとし 毎年 クリスマスには、ディクシーと クリスピンの
かあ お母さんが、一家の クリスマス・ボックスを 出して
きます。クリスマス・ボックスは、ふたの ある 大きな
はこ 箱で、お母さんが 1年を 通して 集めた ものが 入って
います。ディクシーと クリスピンは、その中の ものを使って、
クリスマスの プロジェクトや かざり付けを します。今年は
とく 特に、いろいろと 面白い ものが いっぱい 入っていました。

クリスピンと ディクシーは 友だちを 家に まねき、みんなが
クリスマス・ボックスの 周りに 集まると、クリスピンが ふたを
あ 開けました。ディクシーは、中から カラフルな リボンを取
り だ 出しました。





「うわあ、すごく きれい。」と、サッズが ^い言いました。

やがて みんなは、いろいろな ものを ^と取り^だ出しては、それで ^{なに}何が ^{つく}作れるかなあ、などと ^{はな}話して いました。

「見て！」 ウェスリーが 大きな ^{かい}貝^みがらを ^み見^いつけて ^い言いました。

「ぼくが ^{さき}先に ^み見^いつけたんだよ！」 そう ^い言^いって、ミルトンが ^{かい}貝^みがらを ^みつか^みみました。

「ちがうよ、ぼくだよ。」 そう ^い言^いって、ウェスリーは ミルトンから ^{かい}貝^みがらを ^みひ^いったくろうと しました。

しばらく すると、他の ^{ほか}友^{とも}だちも、他の ^{ほか}友^{とも}だちが ^も持^もっている ものを ^ほ欲^いしがって、^い言^いい争^{あらそ}いになっ てしまいました。

「これは ぼくの クリスマス・ボックスなんだ。だから、ぼくの ^とほ^{かえ}しい ものを ^と取^いるなら、もう ^{かえ}帰^いってよ。」と、クリスピンが ^い言^いいました。

「これ、わたしの クリスマス・ボックスでも あるのよ。
わたしたち ^{りょうほう}両^{りょう}方^{ほう}の ものだわ。」と、ディクシー。

「そんなの、ずるいじや ないか。」と、ウェスリー。

「ほんとに ^い意^い地^じ悪^{わる}だなあ。」 ミルトンも ^い言^いいました。

そして、口ゲンカが ^{つづ}続^{つづ}きました。

「もう みんな、やめて！」 サッズが ^{おおごえ}大^{だい}声^{ごえ}で ^い言^いいました。

みんなは していた ことを ^いい^いったん やめて、
サッズの ^{ほう}方^みを ^み見^みました。



「クリスマスは、いつもより もっと、おたがいを 気づ^きかったり
やさしく する時^{とき}でしょ。」と、サズが 言^いいました。

「サズの 言う^い通りだよ。貝^{かい}がらを ひったくって、ごめんね、
ウェスリー。これ、返^{かえ}すよ。」

「ぼくも、ごめんね。」と、ウェスリー。

「ぼくも、ごめんね。」と、他^{ほか}の みんなも あやまりました。

サズが 言^いいました。「いいことが あるわ。ボックスに 入^{はい}っている
もの^{つか}を使って、みんな^{ほか}で 他^{ほか}の人^{ひと}たちの ため^なに 何か 親切^{しんせつ}な ことが
できないかしら。」

「ぼくたちの 教室^{きょうしつ}に かざり付け^{つか}をして、みんなを おどろかせるのは
どう？」と、ウェスリー。

「ナギン先生^{せんせい}の ため^{ため}に、クリスマス・リースも 作^{つく}ろうよ。」と、
バンブルが 言^いいました。

「教室^{きょうしつ}の クリスマスツリーの
かざり付け^{つか}も 手^て伝^{つた}たら いいね。」
と、クリスピン。

「友^{とも}だちの ため^{ため}に プレゼントを
用意^{ようい}するの^のも いいわね。」と、ディクシー。

「そうしたら、バンブルと ぼくの ワゴンに
プレゼントを の^のつけて、みんなに
とどけ^いに行^いけるよ。」と、ミルトン。



「どれもこれも、
すてきな アイデア
ばかりね。みんなで
いっしょに ^と取り^く組めば、
だれが ^{なに}何を もらうかとか、
^き気になる ことも ないわ。」
と、サッズが ^い言いました。

サッズは ^{かみ}紙と ^とペンを
取り、だれの ^{ため}ために
プレゼントを ^{よう}用意するかを
みんなで ^{はな}話し^あ合っ
^き決めました。





クリスピンとバンブルはナギン先生^{せんせい}のためにリースを^{つく}作り、
ディクシーとウェスリーは教室^{きょうしつ}のかざり^つ付けをすることに
なりました。ミルトンとサッズは、学校^{がっこう}のクリスマスツリーの
かざり^つ付けをすることに なりました。全部^{ぜんぶ} 終わって、もし
まだ時間^{じかん}があれば、次に^{つぎ}だれにプレゼントをあげるかを
みんなで決めようということになりました。

「このストリング・イルミネーションは、教室^{きょうしつ}のかざり^つ付けに
使えるね。」と、ウェスリーが言いました。

「でも、これはナギン先生^{せんせい}のリースに^{つか}使おうと^{おも}ってたんだ。」
そう^い言って、クリスピンがライトをつかもうとしました。

「でも、リースに^{つか}使うには、長^{なが}すぎるわよ。教室^{きょうしつ}のかざり^つ付けに
つかったほうが、ずっときれいに^み見えるわ。」と、ディクシーが
言いました。

「ディクシー・・・！」 クリスピンはいらついて^{おも}思わず^{こえ}声を
あ^あげ、はっと^き気が^つ付きました。「あ～あ。ぼく、また^{はら}腹^たを立てる
とこだったよ。良^よくないなあ。確^{たし}かに、リースには^{なが}長^{なが}すぎるよね。
君^{きみ}たちが^{つか}使^{つか}ったらいいよ。ぼくたちは、何^{なに}か^{ほか}他の^{ほか}ものを
つか^{つか}使うから。」

「ありがとう、クリスピン。じゃあ、代^かわりに^{ちい}こっちの^{ちい}小さな
ベルをリースに^{つか}使^{つか}っていいわよ。」と、ディクシーが言いました。





「うわあ、完^{かん}ぺきだね！ リースには、ライトより
こっちの ほうが、ずっと きれいに 見^みえるよ。」

クリスマス^{まえ}前の 何週間^{なんしゅうかん}かは、みんな、自分の 自由時間^{じぶん じゆうじかん}を
使^{つか}って、家族^{かぞく}や 友達^{とも}たちの ために プレゼントや
かざり付け^{つか}を 作る^{つく}のに 大い^{おお}そがしでした。

みんな、計^{けいかく}画^{かく}していた プロジェクトを 最後^{さいご}まで 楽^{たの}しく
終^おえることが できました。クリスマス・ボク^{はい}スに 入^{はい}って
いた いろいろなものも、全部^{ぜんぶ} 使^{つか}い切^きったのです。

プレゼントは、バンブルと ミルトンの ワゴンに のせられて、
友^{とも}たちや 家族^{かぞく}の 元^{もと}へ 運^{はこ}ばれて いました。みんな、
と^しても 幸^{しあわ}せでした。この年^{とし}の クリスマスは、今^{いま}までで
最^{さいこう}高^{しあわ}に 幸^{しあわ}せな クリスマスに なりました。それは
ひとえに、みんなが 自^じ分^{ぶん}の ことよりも、他^{ほか}の
人^{ひと}たちを 思^{おも}いやったからです。



「おじいちゃん。どうして みんな、クリスマスは
与^{あた}える 時^{とき}だって 言^いうの？」と、トリス^{トリスタン}が
たずねました。





「ふむ、それはいい質問だね。つまりそれは、何年も何年も前の
クリスマスに、神様がわたしたちにものすごく特別なおくりものを
下さったからだよ。それが何だか、お前は知っているかい？」と、
ジェイクおじいちゃん。

トリストンはちょっと考えていましたが、やがて顔をかがやかせて
答えました。「イエス様！」

「その通り。神様は、わたしたち1人1人のために、イエス様を送って
くださった。イエス様は、神様からわたしたちへのクリスマスプレゼントだった
んだ。だから、イエス様がわたしたちと共にいてくださるなら、わたしたちは
ずっと幸せになれるし、毎日がもっと喜びでいっぱいになるんだ！」

「だけど、どうしてぼくたちはプレゼントをあげるの？」

「他の人たちに何かをあげると、その人たちは喜んでくれる。それは、
わたしたちがその人たちを愛していて、気にかけていることを表して
いるからだよ。」

「ぼくも、親切をして他の人たちに喜んでもらえると、うれしいな。」
と、トリストン。

「おじいちゃん、お話をしてくれて、ありがとう！ すてきな
クリスマス・ストーリーだったね。」

「どういたしまして。」と、ジェイクおじいちゃんが言いました。

きょうくん まわ ひと しんせつ
教訓：周りの人たちに親切にしよう。そして、
じ かん あい いけん く
時間をかけ、愛をもって、意見の食い違いを
かいけつ まわ ひと
解決しよう。そうすれば、周りの人たちと
なかよくでき、みんなが幸せになれるよ。

